

「神の国か、地獄か」

2014年10月03日

マルコによる福音書9章42節～50節。わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまづかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。もし片方の手があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。もし片方の足があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。もし片方の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出しなさい。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい。地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。人は皆、火で塩味を付けられる。塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」

主イエスを信じる小さな者をつまづかせる者は石臼を首に懸けられて海に投げ込まれた方がよいと言う。当時、このような刑罰があったらしい。また、片方の手、片方の足、片方の目がつまづかせるなら、それらを切り捨てよ。両手、両足、両目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、片手、片足、片目になっても神の国に入る方がよいと言う。地獄はうじが尽きず、火も消えることのない恐ろしい所であるからだ。主イエスは、人を罪に誘い、危害を加えるようなものは捨て去って、不具者になっても、神の命に与りなさいと語っている。小さい者との対応の仕方によって、神の国に入る者と地獄に投げ込まれる者とに分けられる。旧約聖書でも、新約聖書でも「天国と地獄」「祝福と呪い」「命と裁き」が厳然と分けられている。当然、祝福と命に与る天国に入れと勧めている。勧めとして理解できるが、言葉と行いにおいて、人を罪に誘い、危害を加えたことはないという人がいるだろうか。私など、間違いなく地獄行きである。だから、下記の会話が私の救いである。ある婦人が牧師に「先生、地獄って本当にあるのでしょうか」と聞いた。牧師は「ええ、地獄はありますよ。しかし、そこにはだれもいません」と答えた。地獄はあるが、そこに行く人は一人もいない、皆天国に迎えられている。地獄とは、生きている今、愛を失って自らを貧しくしている状況である。

主イエスは小さく、悲しむ者にひたすら愛を注がれた。そして、罪びとのために十字架で命を捨てられた。片手、片足、片目になって、即ち、自分の身を削って、他を支え生かす者でありなさいという勧めとして受け止めたい。主イエスの言葉は地獄へ行く恐怖を煽っているのではなく、生きている今、愛において神の命に与る「福音」を語っている。福音は赦された者として、神に命を是認された者として、共にあることを喜ぶことである。後半、そのことを語っている。塩に塩気がなくなれば、どうして味を付けられるか。自分の内に塩を持ちなさい。塩は腐敗を防ぎ、味を引き出す働きをする。塩を持って、心の荒廃を食い止め、互いの間を和らぎ、平和に過ごす。

児童虐待、ホームレスの襲撃から始まって、社会的に弱者にさせられた人々を痛めつける風潮が蔓延している。いつの時代にもある悲しみであるが、それゆえに、主イエスの福音は輝く光のように見えてくる。